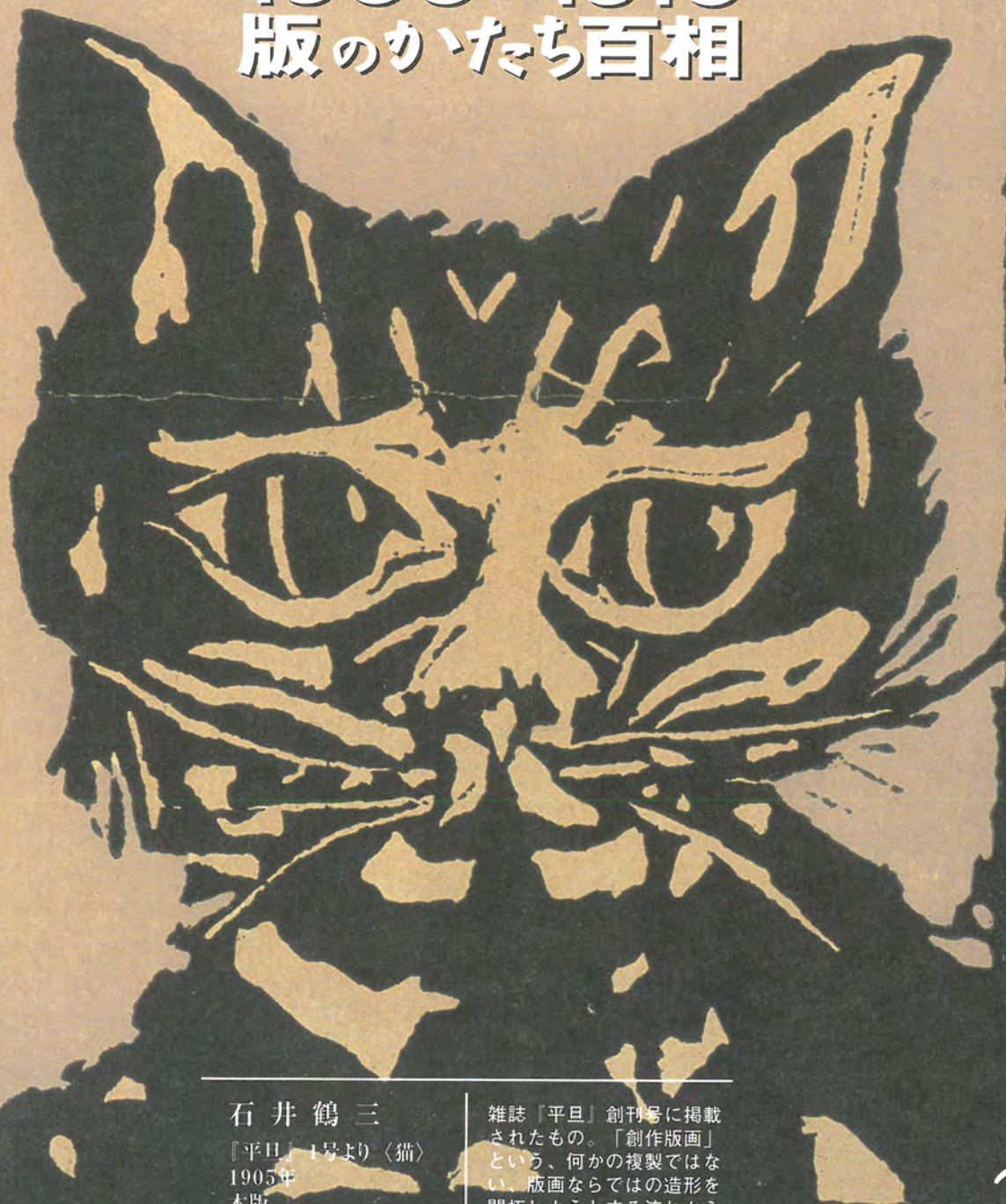


C'n
SCENE

Chiba City Museum of Art, News

千葉市美術館ニュース

日本の版画 Ⅰ
1900~1910
版のかたち百相



石井鶴三
『平旦』1号より〈猫〉
1905年
木版
30.7×22.3 cm

雑誌『平旦』創刊号に掲載されたもの。「創作版画」という、何かの複製ではない、版画ならではの造形を開拓しようとする流れから生まれた作品です。

VOL. 3

版画王国・日本

お正月までは まだだいたい間がありますが、気の早い人はぼつぼつ年賀状の準備を始める頃でしょうね。

手間と時間のかかる年賀状ですが、受け取る人の楽しみは、なんととっても、それぞれ趣向をこらした版画を眺めることです。日本人が年に一度版画家になるのが年末だといわれます。

ところで日本は伝統的に版画、とりわけ木版画の王国です。日本の木版画の歴史は、仏教普及の手段として奈良・平安時代に始まりますが、近世になると宗教性を離れ、民衆のくらしに密着してめざましい発展をとげました。とりわけ都市では、町人たちに実用と娯楽を兼ねたさまざまな視覚情報を与えるマス・メディアとしての木版画の機能が、絵本や挿絵本のかたちで最大限に活かされたわけですから、

岳
は排
ん闌
かい
番

のなかから、一枚摺りによる版画が独立し、発展します。

一枚摺りは最初は墨摺りといって、墨一色だけの素朴な技法によるものでしたが、18世紀になると、町人文化の成熟にともない、色摺りの技法が工夫され発達します。ちょうど現代のテレビが白黒からカラーテレビへと移り変わると同じわけです。色摺り技法が完成したのが錦絵という精巧な色摺りによる一枚版画で、美人や役者、名所などを題材に、人びとの眼を楽しませました。



千葉市
美術館蔵

この錦絵の誕生には、摺物の^{すりもの}といわれる限定豪華版の色摺りが貢献したといわれます。裕福な町人や趣味人の侍が、彫りと摺りに技巧をこらした限定版の特注品——たとえば絵暦（カレンダー）のような——に、趣向を競い合うようになったのが錦絵の始まりというわけです。このように実用性と芸術性、さらには普及性の三拍子を兼ね備えたものとしての江戸時代の木版画は、浮世絵版画の名で総称されますが、その浮世絵版画の高い芸術性が、江戸時代の終わりから明治時代のはじめにかけて、ヨーロッパ人を驚かせ、ジャポニズム（日本趣味）のブームを巻き起こしたのはよく知られるところです。

千葉市美術館で、10月21日から11月24日まで催される「江戸の摺物」展は、このように木版画の芸術性を極めた江戸時代の印刷技術の神髄をお見せするものです。摺物は日本ではあまり知られていませんが、欧米には愛好者が多く、優秀なコレクションが各地にあります。それらのなかから、とくにすぐれたものを集め、日本のコレクションや当館の所蔵品と合わせて展示するもので、日本での摺物の展示としては、これまでにない規模のものとなっています。ぜひご覧下さい。

ところで、 浮世絵版画がヨーロッパ人を驚かせた当時、日本はヨーロッパ文明の大波を受け、伝統文化の危機に瀕していました。最高度にまで発達した木版画の彫り摺りの技術は、その効率の悪さゆえに石版画にとって代われ、次第に廃れてゆきます。一方でその色摺り木版の芸術性を個人の創作に結び付けた創作版が誕生し成長してゆきます。このように新旧交替の過渡期にあたる近代の版画は、これまでは創作版画の出現という観点からのみ意義づけられてきましたが、最近では、伝統の衣替えという、より総合的な視点から、その多彩な創造活動が改めて見直されるようになってきました。

千葉市美術館で、10月12日まで催されている「日本の版画・1900—1910・版のかたち百相」展は、こうした近代版画の動向が、山本鼎、竹久夢二らの活躍によって、もっとも興味ある様相を呈した1900年代（明治33年～43年）に焦点をあてたものです。会期の残りはもうあまりありませんが、これも是非お見逃しなく。

千葉市美術館
館長 辻 惟雄

日本の版画 I・1900～1910 版のかたち百相

新・古・和・洋・複・個
渾然となった版のかたち

日本には、あらためて浮世絵の例をだすまでもなく、版画というメディアの長い歴史が存在します。「日本の版画 I」は、1900年から1910年までというわずかな時間をそのなかから切り取り、照明をあてようとする展覧会です。

1900年代は、芸術のいろいろなジャンル間の垣根が限りなく低くなった時期でした。洋画や日本画といった区別があまり意味をなさなくなり、洋風の日本画や和風の洋画が生まれました。また絵画が文学との結びつきを強め、美しい挿絵の満載された雑誌や豪華な装丁本が刊行されました。複数の分野を手がける画家も多く、彼らは絵画だけでなく工芸図案や漫画、絵葉書などに腕をふるいました。こうした、いわばボーダレスな絵画界の流れに印刷術の革命的な進歩が結びつき、「版」に対する関心が非常に高まったのがこの時代です。印刷と版画との境界線もあいまいなまま、有名無名の作家たちにより、まさに百相ともいうべき多様な版のかたちが生まれたのです。

それでは展覧会の構成に沿って、「日本の版画 I」の内容を大まかにご紹介しましょう。本展は6つのセクションから成っています。

第1部では「浮世絵版画の流れ」と題し、浮世絵系の絵師による作品を集めました。報道媒体としては最後期に位置する日露戦争錦絵と、筒木清方らによる淑やかな小説口絵がこの時期を代表します。当時浮世絵は衰勢期にありましたが、版の技術自体は向上していたことが、繊細な彫摺から伺えます。

第2部「石版画の展開」では、ポスターと漫画雑誌を中心に展示しています。特にたばこ業界と三越呉服店の石版ポスターは本展の見どころのひとつです。多色刷石版と一口にいても当時は未だ描き版で、職人が原画を何枚かの色版に分解して刷り重ねていました。丁寧な手仕事により定着された油性インクの重なりが、独特のつやと重厚な質感を生み出しています。

次ページに続く



波々 伯部金洲
〈三越ヴェール〉1908年
石版 88.0×59.0cm
三越資料館蔵



杉浦非水
『みつこタイムス』8巻9号表紙
1910年 石版 25.8×18.8cm
個人蔵



橋本周延
〈浮世風俗当世振(娘と猫)〉
1905年 木版 72.8×24.3cm
千葉市美術館蔵

浅井忠
池邊藤園『月瀬紀行薫世界』より
1905年 木版 26.5×38.7cm
千葉県立美術館蔵



前ページの続き

第3部は「より新しく自由な造形へ」と題して、文学との交流から生まれた藤島武二、中澤弘光、浅井忠、中村不折、竹久夢二らの作品を取り上げました。彼らは自ら彫刻刀を握る作家ではありませんが、単純で平面的な「版」の効果を計算に入れ、またそれぞれの強烈な個性を感じさせる作品を残しました。

第4部「版技巧の多様化」のテーマは、今では印刷と呼ばれるものも含め、当時いかに複製術が成熟していたかを観察することにあります。水彩画の透明感やパステルの粒子感をも再現し得る高度な技術は、絵画の普及にももちろん力ありましたが、版画の自立性に疑問を投げかけることにもなりました。さらには対立概念としての「創作版画」を生む動機ともなったのです。

第5部「表現へと向かう版画」では、版画を複製の手段とも、複製の手段とも捉えず、版ならではのオリジナルな造形を開拓

しようとした動きを取り上げています。山本鼎が提唱した創作版画という思想は「自画自刻自摺」、つまり作家は画想を実現するために下絵のみならず彫版も摺りも行うべきだと主張しました。山本や雑誌『方寸』に集った作家たちのほか、浮世絵の高い表現性に注目した外国人たちの滞日作を展示しています。

第6部「デザインと版画」は、両者の関わりを装丁本や図案集、パッケージなどに探ることがその主題です。神阪雪佳や津田青楓の図案集、あるいは橋口五葉や杉浦非水の装丁には、時にはとつとつするほど鮮烈な版のかたちが現れています。ジャンル間の対話のなかで、デザイン界の抽象的で自由な造形が版画に何らかのヒントを与えた可能性は大きいのではないのでしょうか。

本展では以上6つの部門のほか、この時代の空気をよりリアルに感じていただくため、「絵葉書ブーム」「1900年代の女神たち」「水彩画の流行」という3つの特集展示を設けました。

1900年代は印刷術や写真術の急速な進歩を背景に、複製であれ創作であれ、「版」をめぐるそれまでにない切実な取り組みがなされた時代でした。新しいものと古いもの、和的なものと洋的なもの、複数性とオリジナリティーとが渾然となった版上の「冒険」の数々を、そして版によせる作り手たちの熱の高さを、この展覧会に感じていただけたら幸いです。

山本鼎
〈漁夫〉
1904年
木版
16.3×11.0cm
千葉市美術館蔵



橋口五葉
夏目漱石
「吾輩ハ猫デアル」中編扉
1909年
木版
22.5×30.0cm
個人蔵

レンブラント〈自画像〉模写
1909年
銅版(エッチング)
15.0×10.8cm
個人蔵



学芸員 西山純子

現代美術作品の展示について

日常の生活空間の中での
作品との出会い。

千葉市美術館では1995年の開館以前、収集した作品を公開するために何回か千葉市民ギャラリー・いなげで新収蔵作品展を開催しました。その際、現在開催中の「関係—河口龍夫」展に出品されている当館所蔵の「関係—蓮の時・葉緑素」を市民ギャラリーの隣にある旧・神谷伝兵衛別荘の2階を使って展示をこころみたくがあります（下段の写真）。生きたままのハスそのものよりもかえってなまなましい印象を与えるこの作品の特徴を昔ながらの和風の室内は訪れたひとびとに美術館の展示室とはまた違ったかたちで伝えていました。

美術館、あるいは現代美術を専門に扱う画廊の展示空間というものは多くが均一的で無表情です。これは作品そのものがくっきりと際立ち、見る人が作品のみに意識を集中させることを可能にさせます。しかしその反面、展示している美術品をなにか標本のように味気なく見せてしまうこともあります。また、現代美術の場合には作品に接する機会が野外などでの設置のほかは美術館や画廊という特定の場所に限られてしまっているため、日常の生活空間、あるいは一般的な家屋の中で作品との出会いを体験することが出来ないままになってしまうことがほとんどです。現代美術が「なじめない」あるいは「難解だ」と言われ

ることがある理由にはこのようなところにも問題があるのかも知れません。

美術館の1階には旧・川崎銀行を保存した「さや堂ホール」があります。これまでいくつかの展覧会にこのホールを彫刻や立体作品の展示会場として用い、来館者の皆さまだけでなく作品を展示する作家のかたがたにも好評を得ています。その理由はどうかや古い建築物が持つ独特の雰囲気のおかげで美術館の展示室で向かい合う時とは違った気軽さで作品に接することができる点にあるようです。今回の「関係—河口龍夫」展でもやはり準備段階の早い時期から河口氏がこの空間に興味を示し、展覧会担当者との打ち合わせの結果、新作「関係—千葉の蓮」がさや堂ホールの空間に合わせて制作されることになりました（上段の写真）。



河口龍夫

関係—千葉の蓮
1996—97年
蓮（大賀蓮）・蜜蝋・銅・他
撮影：斎藤さだむ

関係—蓮の時・葉緑素
鉛・蓮・葉緑素
1992年
千葉市美術館蔵
河口龍夫



学芸員 薬科英也

「友の会」入会のご案内

千葉市美術館は開館以来、より身近な美術館づくりを目指しております。

千葉市美術館「友の会」は、美術を愛する人々にさらに親しまれる美術館づくりを進めるために誕生しました。

皆様のご入会をお待ちしております。

会員の特典は

無料サービス

千葉市及び（財）千葉市美術振興財団が主催する企画展や常設展が無料で何回も観覧できます。

割引サービス

- 千葉市及び（財）千葉市美術振興財団が主催する展覧会図録が割引（販売価格の10%引き）で購入できます。
- 千葉市及び（財）千葉市美術振興財団が主催する企画展や常設展の観覧料が同伴者も割引（3名まで団体料金）になります。

情報サービス

千葉市及び（財）千葉市美術振興財団が主催する講演会等の美術館情報をお届けします。

会員の資格は

- 会員期間は、入会日から1年間です（美術館パスポートの発行をもって、会費納入の領収書とさせていただきます。）
- 学生会員の方は、学生証をご提示（コピーも可）ください。
- 途中で退会されても、会費の払い戻しはいたしません。
- パスポート紛失等により再発行を受ける場合は、手数料が必要となります。

会費の額は

入会金

一般会員	1,000円
学生会員（高・専・大）	500円
ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族）	2,000円

年会費

一般会員	年3,000円
学生会員（高・専・大）	年1,500円
ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族）	年6,000円

入会の申込み方法は

- 美術館受付に備えてある「入会申込書」を利用し、お申込みください。
- 休館日（臨時含む）や年末年始は、お申込みできません。
- 詳細は、千葉市美術館 TEL.043-221-2311までお問い合わせください。

市民ギャラリー利用のご案内

9階 市民ギャラリー

利用時間	10:00～18:00（金曜日のみ20:00まで）
休館日	月曜日及び年末年始

※現在、来年度（1998年）の4月から9月までの利用を受け付けております。
◎詳しくは美術館までお問い合わせください。



9階の市民ギャラリーは、市内で活動する美術団体の方々に作品を発表していただくスペースです。

ギャラリー1・2・3の三室に分かれ、それぞれが絵画をはじめとして、彫刻や工芸、写真など多様な展示に対応します。また三室を合わせ、ひとつの大きな空間として利用することも可能です。

レストランのご案内

11階 レストラン

営業時間	11:00～18:00（オーダーストップ17:00）
定休日	月曜日及び年末年始



お食事・喫茶に美術鑑賞などの後にご利用ください。

ランチ1,000円より（スープ・ライス・コーヒー付）

これからの企画展スケジュール

休館日=月曜日(祝日の場合はその翌日)

開館時間=午前10時~午後6時(入場は午後5時30分まで) 毎週金曜日は午後8時まで(入場は午後7時30分まで)

ハローダイヤル=043-227-8600

日本初

秋季特別展
江戸文化の粋を集めた版画芸術

江戸の摺物 ~粋人たちの贈り物~

10月21日(火)

11月24日(月)祝

抱玉
梅に椿
千葉市美術館蔵



魚屋北溪
和布刈神事
千葉市美術館蔵

ヨーロッパからの里帰り品176点を中心に、合計308点の作品によって、摺物の歴史をひもとき、その魅力をさぐる日本初の総合的な摺物展。

AMERICAN STORIES: Amidst the Storm of Change and Transformation

移動と変容の中で
アメリカンストーリー

11月1日(土) ~ 12月23日(火)祝

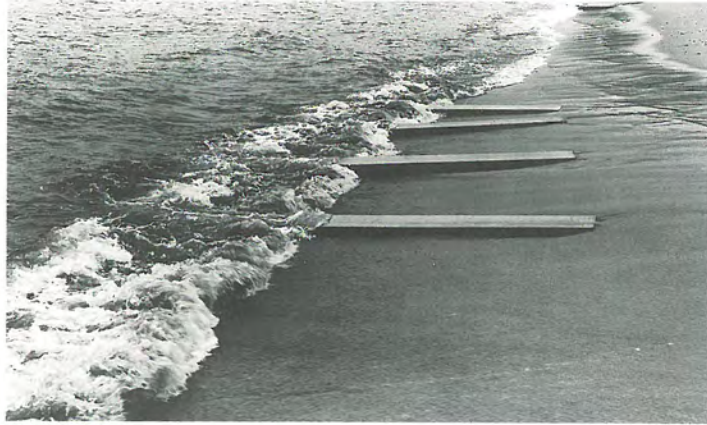


ロバート・コールスコット
ドラクロワへのオマージュー民衆を導く自由の女神 一九七六

◎ 展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合わせください。



美術館の所蔵作品より



河口龍夫

「陸と海」

ゼラチンシルヴァープリント
90.0×148.0cm×26
1970年

河口龍夫は1940年に生まれ、1960年代なかばに制作を開始し、60年代の後半から人間の認識や知覚の根源に対して問いかけようとする作品を制作しています。

この作品は1970年4月22日、兵庫県・須磨海岸で明け方の干潮時に波打ちぎわに固定された4枚の板が潮汐によって変化する過程が26枚の写真によって示されています。

私たちは日頃地図などで明快に線引きされた海岸“線”を知っています。しかし、それぞれの写真に写っている板は陸に置かれていたり、海に浮かんでいたり、同じ状況のものはありません。つまり、人間が決定した地図の海岸線などはほんらいが便宜的なものであり、陸と海の境界はあいまいであることをこの作品は語っているのです。

学芸員 薬科英也



美術館ご利用案内

さや堂ホール (1-2階) Saya-Dou Hall
昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物(ネオ・ルネサンス様式)を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

First Floor Museum Shop

1階

ミュージアム・ショップ

展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

7th Floor HI-Vision Corner

7階

映像コーナー

ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。

10th Floor Library

10階

図書室

室内の美術図書はご自由にご覧になれます。

11th Floor Restaurant

11階

レストラン

お食事・喫茶にご利用下さい。

JR 東日本千葉駅利用

- 東口より徒歩15分
- 京成バス大学病院行(のりば⑦)「大和橋」下車徒歩2分
- 京成バス矢作台市営住宅・川戸行(のりば⑦)または小湊バス八幡宿駅行(のりば④)「広小路」下車徒歩1分
- 無料巡回シャトルバス・チーバス(のりば⑨)「中央区役所・美術館前」下車
11:00～18:00の毎時05分と35分に発車(水曜日運休)

京成電鉄千葉中央駅利用

- 東口より徒歩約10分



千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

〒260 千葉県千葉市中央区中央3-10-8 発行日:1997年10月1日
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Publication: 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba city, Chiba pref. Japan zip.260
制作・印刷:(株)翠松堂/製版所:(株)ダイロク